

# 玉垂

たまだれ  
No.17



敬神婦人会 設立50年奉告祭を終えて（平成18年3月22日）

<http://www.okunijinja.jp/>

## 新緑の中で

本年四月の例祭及び諸行事は恙なく斎行されました。神幸祭当日（十一日）は朝から雨が降っており、神輿渡御の実施が危ぶまれましたが午後より晴天になり、勅使行列等とともに予定通りに執り行うことができました。稚児行列には近年になく多くの子供さんがご参加戴きました。また、十八日の例祭には関係各位のご参列を戴き厳粛に斎行されました。

毎年四月の中旬、古式舞楽保存会では当社「記念館」にて舞楽習得のための合宿をしています。特に本年は、静岡県教育委員会が平成十七年度より実施している「地域における通学合宿推進事業」の本年度最初の指定を受け実施いたしました。「通学合宿」とは、学年が違う小学生達が家庭や学校とは異なる場所で共同生活をしながら学校に通うことです。このための実行委員会を設け、十一日より五泊六日の日程で、氏子内の子供達二、六年生八名が森町立宮園小学校に通いながら記念館にて寝食を共にして舞楽を習得し、十五日・十六日の両日には改装になった舞殿にて舞楽奉仕をいたしました。この合宿を通して、礼儀や作法また我慢することや人を思いやることを、地域の大人である指南役や師匠から学ぶことにより、子供達は明らかに成長し、将来の人間形成に役立つことは間違いありません。また、合宿中は授業を二時限で早退させて戴くわけで、偏に学校関係者及び保護者のご理解が不可欠です。このように重要無形民俗文化財である伝統芸能を保存伝承するためには、様々な協力が必要なことは申すまでもありません。

さて、昨年来より進めております記念事業ですが、第二期として五月中旬より社務所の増改築に着手いたします。現在の参集殿・神札庫の改修から取り組み、八月には社務所の事務機能が移転の予定です。また、募財活動には氏子・崇敬者各位の深いご理解と格別なご奉賛を賜っておりますこと厚く御礼申し上げますとともに、募財委員会の献身的な活動に感謝申し上げます。記念事業は明年も継続しますが、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

新緑に包まれ爽やかな境内ですが、五月下旬には初夏の風物詩である花菖蒲が開花いたします。また、六月の晦日には夏越の大祓式を斎行いたします。皆様方のご参拝をお待ちいたしております。

### 例祭の斎行

本年の例祭並びに諸祭典・神賑行事が四月十五日より十八日に亘り盛大に挙行されました。十五日は、午前九時より「献詠祭」・午後二時より「氏子入り奉告祭」を斎行。十六日午後二時より斎行された神幸祭では、ご神霊を神輿に遷した後、召立により神宝・神器が奉持者に手渡され、お先面（猿田彦）の先導にて神輿渡御が行われました。可愛らしい衣装姿の稚児達も同行し参道中程にあるお旅所では、祝詞に続き巫女舞が奉奏され、再び神輿が巡り出発してきた勅使行列が一の鳥居付近で合流し還幸へととなりました。本年



神幸祭の参進「4月16日（日）」

の勅使役には、鈴木晃様の御奉仕を戴きました。十五日・十六日に舞殿では重要無形民俗文化財に指定されている古式舞楽が天下泰平・氏子の安泰と繁栄の願いを込めて奉奏されました。また恒例行事となります新茶の手揉み実演が保存会の皆様により奉仕され、茶娘による新茶の接待がありました。社務所裏の矢場では弓道愛好会による大弓会が催され、約三〇メートル先的目標掛けて競い合いました。十七日は前日祭の斎行・十八日は午前十時より例祭を斎行し、静岡県神社庁副庁長 櫻井豊彦様、森町長村松藤雄様をはじめ多数の皆様にご参列賜り厳粛に斎行され、大神様を称え御神慮を賜りました。



古式舞楽の行列



稚児行列奉仕者一同



勅使行列・鈴木晃勅使役（真中）



新茶の手もみ実演



一宮地区子供会による「たるみこし」(7基)



## 特別寄稿

## 「近世」宮神主・小國重年大人の偉業に学ぶ

社叢学会副理事長  
秩父神社宮司

蘭 田 稔

久しぶりに遠州一宮に参詣したのは早春三月十一日の昼下がり。そのあと境内の小高い丘に建つ「大宝殿」で開催された社叢学会中部支部の定例研究会に出席して、打田文博宮司と樹木医の正木伸之氏から小國神社の「古代の森」について詳しいご講話を拝聴し、さらに手入れの行届いた社叢と、表参道に連なる見事な杉並木に対する樹勢回復への土壌改良作業などを実際に見学して、大いに充実した勉強の機会をいただいたのは望外の幸であった。学会の中部支部研究会を主催される林進先生や岡村穰先生をはじめ愛知県から遠路参加された多くの会員の皆さんも、大変喜んで帰路に付かれた様子であった。

小國神社の遠州一宮にふさわしいご由緒と神域の森厳なたたずまいとが、まさしく全国に屈指の大神に列することは元より周知のことではあったが、今回あらためて実際に学ぶことのできた成果の一端を記して、感謝の素意を表したい。

実は、私が何よりも喜びを感じたことは、果たして我が道の先人たちに逸早く社叢の深い意義をそれと自覚して宮々と青林の実践を神祇奉斎の伝統によりがえらせ先覚者がこの地に居られたという事実であった。いうまでもなく、その人物は、遠州国学の高い水準を示す業績を挙げつつ一宮累代の神主職を貫かれた、小國重年大人（一七六六―一八一九）その人である。

幸いに、今回打田宮司のご講話に加えて、いずれもご惠贈に与かった二冊の参考文献、すなわち平成九年に先々代の水野修次宮司が発刊された大冊の『小國の神―遠江國一宮小國神社誌』並びに小國家を継ぐ先代の小國忠伯宮司とご遺族が同十三年に刊行された塩澤重義氏の好著『国学者小國重年の研究』をひもとくと、重年大人の尊い人となりとご事績のほぼ全貌を学ぶことができるが、本稿では、御社の名立たる「古代の森」に関わる大人のご功績に絞って称揚するにとどめた。

塩澤重義氏は先述の著書に重年大人の植林事業を論じるなかで、「小國重年は国学者として声望が高かったばかりでなく、神道の故実に精通し、神社経営に就いても広大な面積の神域に植林を施して経済的基礎を固めた実績は、実に大きい。」と記しておられる。氏によれば、當時は一般に造林に意を用いる者はなく、例外として元禄年中に北遠の山住神社の神主、山住大膳亮茂辰なる先覚者が山住杉の良材を育てた、またその百年後に重年大人も先見の明あって小

國神社の社有林に杉松の苗木を計画的に植え付けて山林経営の範を示したとし、「今風にいうならばこの二人は緑化功労者である」と評しておられる。しかも特筆すべき文章が後に続く。すなわち「尤も重年は社有林の経済的効果のみを念頭においたのではなく、神域の山そのものに神霊が宿り給うとする古代思想があり、その神山をより清浄に、より荘厳ならしめねばとの意志が働いていたものと考ええる」として、その証左に大人が創始した毎年正月七日（現行は四月一日）の相祭を挙げ、その際に奏上した祝詞に『日本書紀』著者の記す『古事記』ではない）所載の素戔嗚尊と御子神たちの植林神話を引用しているのを指摘して、大人の決意のほどを紹介しておられる（同書一三〇頁）。

斯く塩澤氏が指摘されるように、実は近世においても神道家や国学者のなかに神域の社叢がもつ奥義を学問や祭祀の域に採りあげた先人は、他に皆無といってよからう。もとより遙か先史以来、日本の神霊は豊かな自然に宿り給うことから人里近い氏神鎮守の社であつても森深く鎮まるといったたずまいは、近世といわず現代にいたるまで心ある人々が大切にきてきている習いではある。神霊の棲まう社叢であるからこそ禁足地や千古不入の霊地として、天然のままに植生を守り抜き老樹や大樹をこ神木と仰いで斧を入れぬ信条を当然に固めてきたのが地元民代々の良識であった。したがって全国各地の社叢といえは、古来亨々たる大樹の群落に恵まれていたためにも確かだが、おおよそは神社ならではの林相がごく当然の家郷景観であった。

ところが、この余りにも当たり前の身近な風物であることから、実は中世以来の学者や神道家も、近世以来の国学者や神職たちも神社の社叢を学問の題材や神道教説のなかに特に言挙げする者もほぼ皆無に等しく、いわんや重年大人のように社叢育成を神事にまで採り入れた例は、残念ながら他に見当たらないのである。

現代は、今さらながら森林こそが地上すべての生き物を育んできた生命の母胎であることに気付かされた時代である。水源に豊かな森あつてこそ山から河、里から海へとあらゆる生命のサイクルが栄えてきた、その恩恵を神の恵みとして古来の日本人は社叢を祭祀の聖地にしてきたはずである。賢明にも逸早くそれを覚られた重年大人の遺業を「古代の森」と累代に称揚し今に活かしておられる小國神社の打田宮司はじめ関係各位に心からの敬意を表したい。

## 筆者略歴 蘭 田 稔（そのだみのる）

昭和十一年（一九三〇）埼玉県秩父市生まれ  
昭和三十五年（一九六〇）東京大学文学部卒業  
昭和四十年（一九六五）同大学院博士課程終了  
現在 京都大学名誉教授 皇學館大學特任教授  
秩父神社宮司 埼玉真神社社長 神社本庁理事  
神道国際学会会長 社叢学会副理事長

著書 『祭りの現象学』『誰でもの神道』  
『文化としての神道』  
『神道―日本の民族宗教』（編共著）  
『日本宗教事典』（共編共著）  
『神道大辞典』（共編共著）

### 遠江國一宮小國神社 敬神婦人会設立五十年 記念式典の実施

#### 記念式典の実施

昭和三十二年四月三十日に設立された当社敬神婦人会（小池まさ子会長）では、全国敬神婦人連合会会長久邇正子様のご臨席を賜り、三月二十二日に総勢百三十七名の出席のもと、設立五十年記念式典を開催いたしました。

当日は、午後零時三十分より当社拝殿にて奉告祭が斎行され、祝詞奏上後、小池会長、久邇会長様が玉串拝札をいたしました。その後、さのや会館にて記念式典が開催され、久邇会長様より、「半世紀にわたり、氏神様へのご奉仕を中心に、様々な講習会や研修会を実施し自己研鑽に努



全国敬神婦人連合会・久邇会長様のご祝辞



小池会長より打田宮司へ記念品の贈呈

められるとともに、会員の親睦を深め、現在では会員の数も百五十名を数える程になられたと承っております。まさにこうした積み重ねが私ども敬神婦人の手本となるものと存じます。」と祝辞を賜りました。さらにご来賓の静岡県神社庁副庁長櫻井豊彦様、静岡県敬神婦人連合会会長山田益美様、当社打田宮司よりご祝辞を戴きました。引き続き小池会長より記念品の贈呈が行われました。式典後には懇親会が行われ、責任役員鈴木三千雄様の乾杯のご発声により宴が始まり、終始和やかに親睦をお図りいただきました。また、会員有志による大正琴演奏等の清興が行われ、中でも会員六名による「マツケンサンバ」の踊りでは、大変な盛り上がりでありました。

### 周智支部神社関係者 大会での表彰

#### 大会での表彰

去る三月九日森町文化会館におきまして、神社庁周智支部管内（森町・浜松市春野町）七十二社の神社関係者が集い二日に一度の大会が開催されました。

記念講演では日本大学の百地章教授より「皇室典範改正の問題点」について詳しく講演を賜りました。

また、本席上において神社功労者の表彰が行なわれ、氏子地区より左記の皆様が表彰の栄に浴されました。ここに報告いたしますとともにお祝い申し上げます。

- 宮代東 宮谷古七郎様
- 宮代東 筒井輝男 様
- 橋 白幡富幸 様
- 円田 野口富彦 様



受賞者・宮谷古七郎様

### NPO法人社叢学会 中部定例研究会の開催

#### 中部定例研究会の開催

神社において歴史を護ることはすなわち社殿等明らかな形をなしている物もありますが、漠然としていながらも社殿をとりまく環境いわば神社の森自体の護持にあります。端的に神社には森があるという考えになりますが、ではなぜあるのかという意義、必要性を認識することも大切です。

社叢、いわゆる「神社の森」・「神々の森」を調査することにより日本人としての普遍的な思想や習慣、またそこから起きた文化などを明らかにし、自然保持の意義・必要性を唱えている社叢学会の中部定例研究会が、三月十一日に秩父神社宮司・社叢学会副理事長の藺田稔氏をはじめとする会員約五十名参加のもと正式参拝執行後、大宝殿にて開催されました。「小國神社の社叢について」というテーマに基づき打田宮司より現在の境内木の大半はおよそ二〇〇年前に小國重年大人の植林事業によるものであるなど社叢の歴史や、さらに現在の保護活動について説明をいたしました。その後、境内の森をご案内し、樹木医の正木伸之氏により参道杉並木の保全作業行程をご覧いただきました。



社叢学会中部支部定例研究会

# まつり歳時記

五月〜九月

## 五月

臯月さつき

- 一日 月次祭 (午前九時)
- 五日 こども祭 (午前十時)
- 六日 本宮山青葉祭 (午前十一時)
- 十八日 月次祭 (午前九時)

## 八月

葉月はづき

- 一日 月次祭 (午前九時)
- 三日 甲子祭 (午前九時)
- 六日 本宮山月次祭 (午前十時)
- 十八日 月次祭 (午前九時)

## 六月

水無月みなづき

- 一日 月次祭 (午前九時)
- 一日 花菖蒲園開園奉告祭 (午前九時)
- 一日 宮代神饌田御田植祭 (午前十一時)
- 一日 花菖蒲観賞祭 (午前十時)
- 四日 甲子祭 (午前九時)
- 四日 花しょうぶまつり (午前十時半)
- 六日 本宮山月次祭 (午前十時)
- 十八日 月次祭 (午前九時)
- 二十一日 御田植祭 (午前九時)
- 三十日 夏越の大祓式 (午後三時)

## 九月

長月ながつき

- 一日 月次祭 (午前九時)
- 六日 本宮山月次祭 (午前十時)
- 十八日 月次祭 (午前九時)
- 二十三日 秋季皇霊祭遙拜式 (午前九時)
- 二十五日 御柱祭 (午前九時半)
- 二十五日 敬老祭安心祭 (午前十時半)

## 七月

文月ふみづき

- 一日 月次祭 (午前九時)
- 六日 本宮山月次祭 (午前十時)
- 十八日 月次祭 (午前八時)
- 三十一日 境内地譲渡記念祭 (午前八時)
- 三十一日 愛宕神社例祭 (午前九時)



石楠花



花菖蒲・「水の光」

## 花菖蒲の開花

本年は春先から暖かく、境内を彩る草花も例年より早く開花しています。梅・さくら・石楠花など春の花々が咲き終る頃、夏の爽やかな風の中にひとさわ優雅に咲く花菖蒲が開花します。門前の一宮花菖蒲園では、約一二〇〇坪の園内に一三〇余種の花菖蒲が五月下旬より六月下旬までの間楽しめます。見頃は六月上旬より中旬になり、早生・中生・晩生の花々が咲き競い、また梅雨空の下では一段と鮮やかに映ります。現在、全園で新芽がすくすくと伸び、開園が待ち遠しく感じられます。また園内では開園期間中に、花菖蒲の株の即売もしていますので係員にお申し出下さい。古代の森を背景に初夏の彩りをお楽しみ下さい。

## 古代の森シリーズ⑬

### 手水舎

手水舎は門前より参道を進み、二の鳥居手前の西側にあります。手水は古来より「魂を洗う」とされる意味があり、参拝にはかせない作法です。門前の被橋を渡り、参道の玉砂利を歩き心地よい音で心を静め、手水にて心身ともに清々しい気持ちでご参拝いただきます。手水の作法は、はじめに右手で柄杓に清水を汲み左手にかけて洗い清めます。次に柄杓を左手に持ちかえて右手を洗い清めます。最後に柄杓を右手で持ち、左手のひらに水を受け、その水を口にふくんですすぎます。口をすすぎ終わってから、もう一度左手を水で流します。当社の手水舎の水は御本殿の御垣内の真名井より汲み上げていて、「お水取り」の参拝もあります。この手水舎は御鎮座一四五〇年記念事業に伴い、移転の予定です。



手水舎 (てみずや)

### 茅の輪神事

#### 「夏越の大祓」のご案内

六月三十日（金）午後三時より夏越の大祓式が斎行されます。大祓とは、心身についた罪や穢・不浄なものを人形に移し、川に流して祓い清める神事のことです。特に夏越の大祓では、梅雨の時期に多い流行病や疫病にかかることなく、暑い夏を健康で過ごせるように茅の輪くぐりが行われます。くぐり方は、茅の輪の手前で「蘇民将来」と三回唱え、左右左と（8の字を書くように）三回くぐります。

この茅の輪神事は、奈良時代の「備後国風土記逸文」に基づいており、「その昔、北海におられた武塔神が南海の神の娘に会うため、諸国を巡っていた時のことです。ある土地に来たところで日が暮れてしまい、そこに住む将来兄弟に宿を貸してほしいと言いました。弟の古豆将来は、裕福であるにもかかわらず宿を貸そうとせず、兄



茅の輪神事

の蘇民将来は、大変貧しかったのですが喜んで宿を貸し、御座所をつくり粟飯を炊いてもてなしました。

それから数年が経ち、武塔神が以前の恩返しをしようと兄の家を訪れました。「私は、速素戔鳴神である。もしこれからの世に疫病が流行りだしたなら蘇民将来の子孫と云って茅を輪の形にして腰に付けなさい。そうすれば疫病から免れるであろう」と教えました。その夜、疫病が発生し、言われた通り茅の輪を腰に付けた蘇民将来と家族は、疫病から免れました。これが茅の輪神事の由来とされています。

この大祓式にはどなたでもお申し込み及びご参列が出来ますので、ご希望の方は当社までお問い合わせ下さい。皆様と一緒にお願いし、暑い夏を乗り切りましょう。小國神社社務所 大祓係

電話〇五三八（八九）七三〇二



茅の輪御守 -初穂料600円-

※「ご家庭玄関口にお祀りし「蘇民将来」(疫病除けの言葉)と三回唱えます」

### 花菖蒲まつりのご案内

毎年当社の花菖蒲が最盛期を迎える六月上旬に「花菖蒲まつり」を開催いたします。当日は野点や琴・尺八の奉納演奏、盆栽の展示・即売などを催します。本年は六月四日（日）に開催しますので、皆様お揃いで初夏の爽やかな一日を過ごされてみてはいかがでしょうか。



森町茶道愛好会による野点

### 秋の写真コンテストのご案内

初秋から晩秋にかけて宮川沿いの紅葉の景観は、改めて自然の豊かさを感じさせられます。五回目を迎える写真コンテストは「秋」をテーマに募集いたします。昨年はスナップ写真のご応募が少なく、七五三詣りや紅葉狩風景写真などもご応募下さい。応募チラシは十月下旬に当社と周辺カメラ店で配布いたします。応募作品は四切・四切ワイドが審査対象になります。



宮川沿の紅葉

### 命 名

平成十八年二月一日〜平成十八年三月三十一日

- |    |    |     |     |    |     |
|----|----|-----|-----|----|-----|
| 川崎 | 太馳 | 掛川市 | 服部  | 芳音 | 袋井市 |
| 三上 | 愛斗 | 磐田市 | 押久保 | 樹紀 | 磐田市 |
| 池谷 | 月花 | 掛川市 | 倉嶋  | 花梨 | 森町  |
| 幸田 | 藍杜 | 森町  | 相羽  | 明依 | 浜西市 |
| 寺田 | 有菜 | 浜松市 | 大石  | 煌斗 | 浜松市 |
| 青島 | 彩貴 | 磐田市 | 佐竹  | 紅哉 | 森町  |
| 谷口 | 侑  | 袋井市 | 泉   | 遼哉 | 浜松市 |
| 松浦 | 和香 | 掛川市 | 村木  | 奏音 | 浜松市 |
|    |    |     | 大澄  | 嵐  | 磐田市 |

○当社では、お子様の命名を申し受けております。

社報「玉垂」第十六号

（平成十八年三月一日発行）の紙面に誤りがありましたので、訂正の上お詫の申し上げます。

誤 七ページ 岩堀 大  
正 岩堀 祐大

「小國の杜・点描」



染井吉野



新緑（宮川沿）



古式舞楽（蝶の舞）



勧学祭・新入学生の玉串拝礼



桜まつりの銭太鼓出演の皆様

編集後記



紫陽花（あじさい）

○「玉垂」十七号をお届けいたします。三月中旬に当社にて開催されました「社叢学会中部支部定例研究会」にご出席されました秩父神社の田宮司様から玉稿を戴きました。国学者小國重年のご事績の一面をどうぞご味読ください。

○毎年五月五日のことも祭には当社で命名された幼児達にご両親とともに参列されます。拝殿を歩き廻る子もいて、とても賑やかです。

○新緑と初夏の花々が咲くこの時期は、森林浴をしながら散策するには格好です。多くの皆様にお楽しみいただいております。

表紙写真について

平成十八年三月二十二日（水）午後一時、遠江國一宮小國神社「敬神婦人会設立五十年奉告祭」を斎行後に拝殿前にて撮影いたしました。

全国敬神婦人連合会久邇正子会長様にご参列賜り、御神前にて奉告するとともに会の更なる発展を祈願いたしました。

平成十八年五月十五日  
 「玉垂」（たまだれ）第十七号  
 題字揮毫 神社本廳前総長 工藤 伊豆  
 発行 小國神社社務所  
 郵便番号 四三七一〇二二六  
 住 所 静岡県周智郡森町一宮三九五六一  
 電話番号 〇五三八（八九）七三〇二  
 FAX 〇五三八（八九）七三六七  
 印刷 (株)デザインオフィス エム・エス・シー